

第2日 シンポジウム

発題要旨

『ドリアン・グレイの肖像』——ワイルドの視点

千葉 剛

(東京農業大学助教授)

この作品は序文ひとつ取り上げてみても多様性に富んでいるので様々な論旨で分析することが出来る。ワイルドがこの作品を書き上げるに当たっての構成の柱は何かとか、作品全体として言いたかったことは何かという視点から考えて、その要旨を次の三点にまとめてみたいと思う。

まず第一点は、ワイルドがこの作品の中心に三元論を置いていたということである。三つのポイントというものは、その基盤がたとえ歪んでいたとしても、必ず安定するものである。この原理は指三本を机の上に立ててみればすぐに分かることである。ワイルドは、この三点の安定ということをよく承知していて、これを『ドリアン・グレイの肖像』の中で実験してみたかったのではないだろうか。具体的に言えば、この作品はドリアン、ヘンリー卿、バジルの三人の美と倫理観にまつわる対話が柱となって展開している。この三人の人物像についてはワイルド自身が手紙の中で次のように述べている（ラルフ・ペイン宛、1894年2月12日付）。

バジルは僕自身、自分はこうだと考えているその自分であり、ヘンリー卿は、世間が色眼鏡で見ている僕であり、ドリアンは、多分いつか新しい時代にしようが、僕がそうなりたくて願っている自分です。

このような作品に於ける三元論は童話『漁師と彼の魂』でも見られるもので、この中でワイルドは、心と魂と肉体の合一を述べている。

第二点は、『ドリアン・グレイの肖像』はワイルドの芸術観が表わされたものであるということである。つまり実際に芸術観を体現した時の危機感を言いたかったのではないだろうか。これはドリアンとシビル・ペインとの関係でよく分かる（第七章から第九章）。素顔より仮面、自然より人工的なものを重ねると危機が訪れるということである。ドリアンが女優のシビル・ペインを愛して、素顔の彼女を見捨てた時、彼女の死（自殺）という悲劇をもたらしてしまう。この時ドリアンは当事者としてではなく第三者の眼で対応することになっている。この観察眼が、倫理的にも非常に興味深い。

第三点は、ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』の中で人間の可能性を経験させたかったのではないだろうか、ということである。つまり現実から現実でないものを創り上げることこそ芸術家（作家）の本当の喜びであるというのである。これは、ドリアン自身の肖像画が彼が悪事を重ねる度に肖像画が変化してゆくという怪奇的なあら筋と結末を見れば分かることである。

ドリアンは時間の経過にもかかわらずに若さを保ち、逆に肖像画の方がドリアンの悪事につれて少しずつ変貌してゆく。つまり肖像画は良心の写し絵ということになる。そこでドリアンは、肖像画の中の自分と肉体を持った自分と、どちらが本当の自分なのか見分けがつかなくなってしまい肖像画にナイフを突き立ててしまう。つまり良心を殺すためにナイフを突き立ててしまう。ところが実際にはドリアンは自分の胸を突きさしており、醜悪な容貌に変わり果て、肖像画の方は若さと美貌にあふれたドリアンそのものだった。ワイルドは、主人公の死によって悪を殺し、結果として人生を肯定したのである。だから『ドリアン・グレイの肖像』は、人生を否定した物語ではなく、人生を肯定した物語であると言えよう。そうであるからこそ主人公のドリアンは死ななければならなかったし、同じようなことはサロメにも当てはまる。

どうやらワイルドには、人間は罪を犯す迄行きつかないと個性が豊かにならないという考えがあったらしい。確かに、ドリアンは始めは無個性だった。それがヘンリー卿に触発されて悪事を繰り返す度に、つまり、個性が強くなる度に肖像画が変化してゆく。しかしその個性が消えた瞬間にドリアンは破滅してしまう。肖像画の変貌の経過を見れば、人間のエゴが強くなればなる程美が失われると言い換えることも出来よう。このように多様性に富んだ読みを可能にしているのがそのままワイルドの奥行きを感じさせることにもなっている。

発題要旨 「鏡」としての「画像」

——『ドリアン・グレイの肖像』論考——

梅津義宣

(尚絅女学院短期大学助教授)

オスカー・ワイルドの唯一の長篇小説『ドリアン・グレイの肖像』を彼の芸術論の具現化と見做しながら、本作品の重要な位置を占める〈鏡面的特性〉について考察したいと思う。〈「鏡」の役割を果たす「画像」〉について考究することが、本作品に展開されるワ